流離譚（新潮連載　昭和五十一年七月号　第五回）

流離譚の第五回は安政の地震関連から始まり、次の文助日記が引用されています。

五日之大地震ニ付キ、大波死人数知レズ。御城下ニ六百人位イ、幡多中村町ニ三十人、甲浦ニ八十人、横浜ニ九人、其ノ余、諸浦ニ死人ハ夥シ。手結浦三百軒ノウチ二百軒流ル。夜須、横浜ニ二、三軒残ル。宇佐千軒ニ六十軒残ル。

赤岡附近　手結港　（村上製）

この絵ハガキは昭和初期と思われます。安政時代も同じような家並であれば「手結三百軒のうち二百軒流れる」被害も分ります。昭和南海地震の時も同じ家並であれば、同じような被害が出たと思ったのですが、夜須町史の昭和海南地震災害の津波の状況によると「・・・㈡浸水家屋　夜須手結、千切、坪井地区において浸水家屋六０戸、手結地区において床上一尺及至三尺程度にして、千切・坪井地区にては床下程度であった。」。文助日記の「二百軒流れる」に比べ極端に少ないです。町史に「安政地震の教訓

を生かして・・・避難した人も多かった、・・・」とあるので津波対策も行われたのか「昭和海南地震の津波の高さ　三メートル乃至四メートルと認められ、・・・」と今回想定されている地震の津波より低く被害が少くないのか。

文助日記の続きが書かれている。

同廿五日、土木ダ止マザルニ大雨雷。

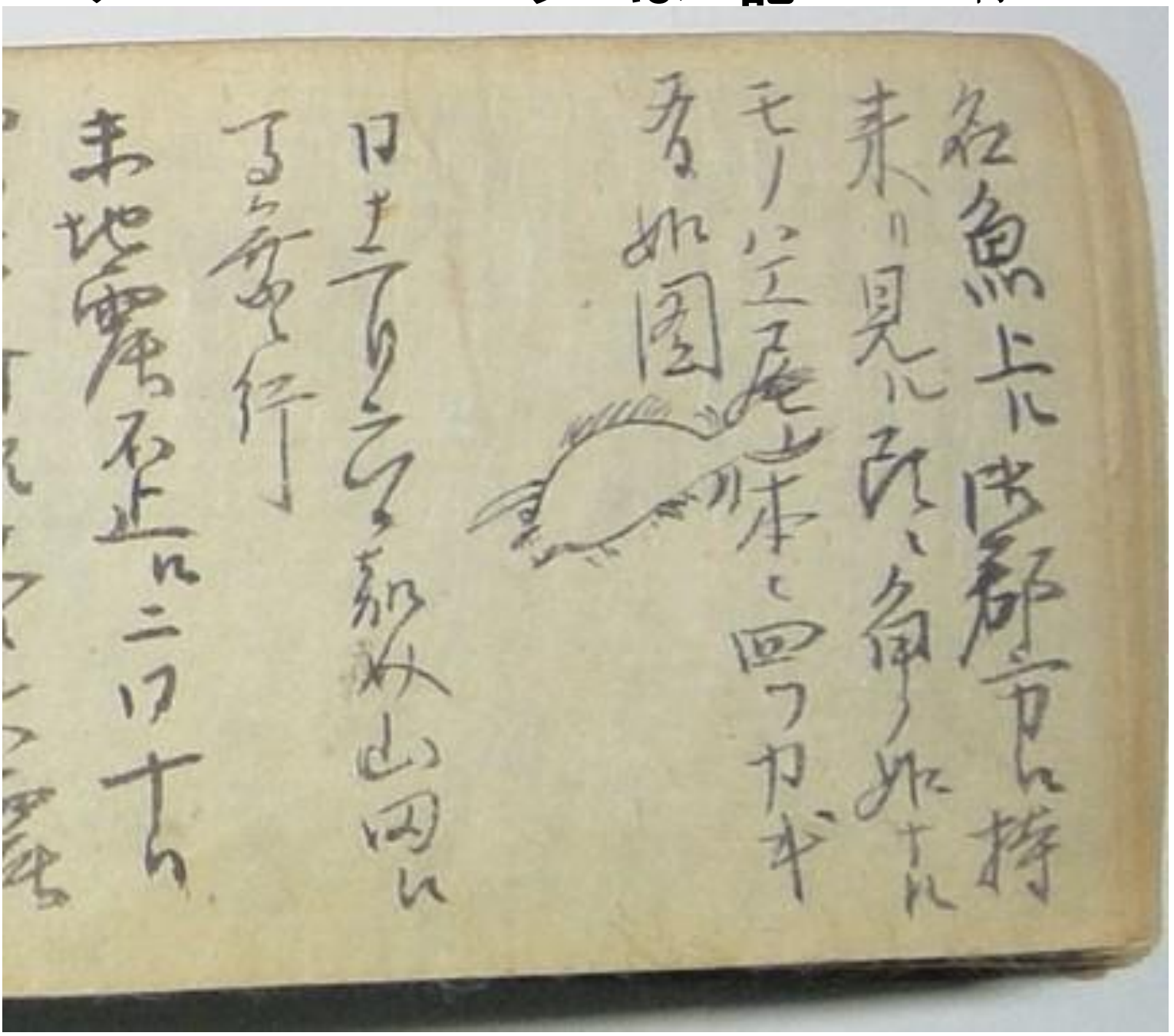
同廿六日、晴ル。未ダ止マズ。

十二月五日迄、地震止マズ。同五日、岸本浦エ名ノ知レザル魚上ル。御郡方ニ持チ来リ見ル。頭ニ角ノ

如クナルモノハエ、尾ノ本ニ四ツカギ有リ。

この怪魚は文助日記に絵描かれていた魚は深海魚リュウグウノツカイと推測します。

・・・地震は、ただの自然現象という以上に何か天地の変動す



る不気味な徴候の如くにも受け取られであろう。・・・

安政六年になって、ようやく地震の心配は遠のいた様子だ。前年に本家の平八正秀が死に、その家督は文助の長男覚之助が養子に行って受け嗣いだ。次男の嘉助も公文勘十郎方から嫁を迎へ、ゆくゆくはお西家のあとを嗣ぐことになろう。長男覚之助は安政三年に藩から派遣されて長崎に留学するなど、将来を嘱目された秀才であり、次男の嘉助は学問は劣るが、剣術と砲術に長じてゐる。この下に三男の道

之助があり、これはまだ少年であるが、なかなか俊敏で機知にとむ性格である。お下家の恒之進、お上家の権馬はともに二十代の青年で、まず文助の息子のようなものであるから、いまや文助は安岡家全体の長老である。それだけ責任も重いが、物心ともに余裕を生じたらしく、この年から文助はしきりに友人を呼び集めて、琴を弾いたり、茶の湯をやったり、また歌道の師匠についてあまりうまくない歌を詠んだりしはじめている。

流離譚では文助、恒之進、覚之助のことなどをさ

らっと文助が家の長としてコントロールしている様に書いていますが、違っていると思います。次に文助日記などから関連記事を抜き出し、その裏を推測します。

弘化三年　本家安岡平八正秀の息子宗七死去

嘉永四　　躬覚之助代勤奉願御聞届之上代勤ニ出ス

嘉永五　　恒之進の長女ウマ誕生

嘉永六　一月御駆初有之恒之進相勤首尾能相済

安政元年四月二十五日覚之助の長男平太郎誕生

六月三日覚之助本家江養子参ル

・・・文助の気持ち

安政三丙辰

正月十一日御駆初雨天此時覚之助相勤首尾能相済

六月十五日覚之助長崎表江出足晴天

八月四日曇小雨少ふる此日恒之進婚礼

八月七日日和此日恒之進江戸江出足

安政四年　二月覚之助長崎から江戸に行く

安政四己年　閏五月十一日安岡覺之助俄ニ帰国

・・・岩井日記の記述

六月二日　日和此日覚之助滞宿

十一月六日恒之進　帰宿
十一月八日日和　恒之進客　婚禮
安政五年　六月二十一日　安岡平八正秀死去

お西の代勤として覚之助を提出していたが本家の跡取りになった。その経緯は今の考えでは余りにも家の継続を重視し、人を無視しているようです。
本家の跡取であった宗七正常が十四歳で死去。お西では覚之助を跡取すべく代勤などの手続きをしていた。恒之進に本家から嫁に来た万喜との間に長女

ウマが誕生と同じ頃、万喜は実父の言葉で、恒之進と別れ本家に戻り、覚之助の間に長男松静（後の平太郎正明）を誕生。覚之助が本家の跡取の先行策か。覚之助が藩命で長崎に行き、恒之進は桑（縁戚外）と婚禮した直後に藩命で江戸に行く。

長崎に行った覚之助が江戸に行く。従兄弟同士の恒之進と覚之助が江戸で一緒になる。恒之進の気持ちは納まらず、江戸で覚之助と一緒になるが宴席でも並ぶこともなく、恒之進の江戸日記に覚之助の名は出てこない。

恒之進と一緒に江戸の研修来ていた岩井の日記に覚之助が「俄に帰国」、別れの宴席などが書かれている。覚之助が土佐に戻ってから一年後、本家の平八正秀が亡くっているので、相続の事前処理の帰国とも勘ぐれる。

万喜はお家の為に恒之進及び幼い娘と分れ本家に戻り、江戸研修から一年後に戻って再度式を挙げている。これらを仕組んだのは文助でなく、万喜の実父で長老の本家の平八正秀と考えます。